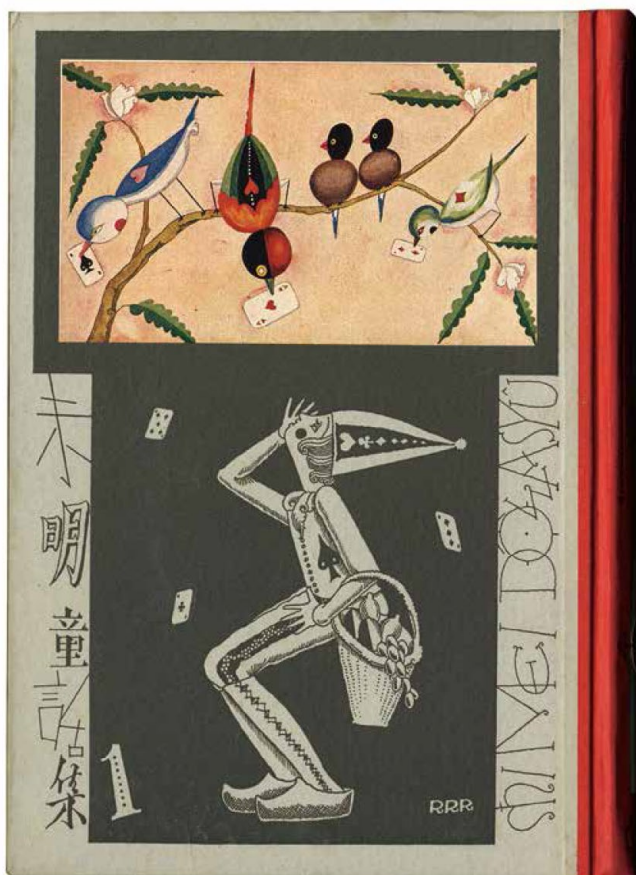


## 丸善版『未明童話集』の魅力



写真は、昭和 2 年（1927）1 月、丸善株式会社から刊行された『未明童話集』第 1 巻の裏表紙です。装幀は武井武雄が担当しています。

大正末年、未明は『小川未明選集』5・6 巻に童話を 120 編収めたものを刊行していますが、引き続き、昭和初年、丸善株式会社から『未明童話集』全 5 巻（昭 2・1～6・7、収録童話数 221 編）を刊行しました。

丸善版『未明童話集』は、刊行部数が少なかったのか、全 5 巻を揃えている図書館はあまりありません。

『小川未明選集』全 6 巻と丸善版『未明童話集』全 5 巻の出版の間には、時代が大正から昭和へかわった意識の変化と、円本時代の到来で出版事業が活気づいてきた変化がありますが、未明にとっては、『小川未明選集』刊行後、小説の筆を折り、童話に専念しようという重要な思いの変化がありました。「今後を童話作家に」（「東京日日新聞」大正 15 年（1926）5 月 13 日）で〈童話宣言〉をしたとき、未明は、童話というジャンルを自らの思想を盛る唯一の器に選んだわけです。

『小川未明選集』が小説と童話を書き分けていた時代の集大成であるとするれば、丸善版『未明童話集』

は、それまでの童話の精華（1～3 巻）と、今後の童話の姿を自身の意気込みとともに伝える意味を持つものでした（4～5 巻）。童話集の発表年月と装幀挿画者名、収録童話数と初収童話数は、次のとおりです。

昭和 2 年 1 月『未明童話集 1』（装幀：武井武雄、挿画：初山滋、48 編中 12 編初収。）

昭和 2 年 9 月『未明童話集 2』（装幀：村山知義、挿画：川上四郎、42 編中 9 編初収。）

昭和 3 年 7 月『未明童話集 3』（装幀：初山滋、挿画：武井武雄、46 編中 15 編初収。）

昭和 5 年 7 月『未明童話集 4』（装幀・挿絵：初山滋、42 編中 34 編初収。）

昭和 6 年 7 月『未明童話集 5』（装幀・挿絵：岩岡とも枝、43 編中 37 編初収。）

未明は、当時、童話作家として、幼年向け童話、大人向け童話を自在に書き分けられる力量を備えていました。とりわけ『未明童話集』4～5 巻は、昭和に入ってから、未明が自信をもって書いた童話を収録したという点で大事な意味をもっています。その中の一つ「金魚売り」（「赤い鳥」昭和 2 年（1927）6 月）を紹介しましょう。

おじいさんが、春のさびしい道を通って、金魚売りにやってきます。すべて自分で育てた金魚ですから、弱った金魚も大切にしました。ある少年が金魚を買いにきて、弱った金魚を買っていきます。おじいさんは、来年また来るよと少年に約束して、別れます。翌年、おじいさんがやってきて、少年の金魚が大きくなったのを見て喜びます。少年はまた来年もくるの？と聞きますが、年老いたおじいさんは、今度は必ず来るとは言わなかったという話です。

昭和期の未明童話には、静かな抒情が作品に横溢しています。丸善版『未明童話集』には、忘れてはならない魅力がもう一つあります。それは童話集に挿入された数々の挿画の魅力です。これについては、あらためて紹介します。